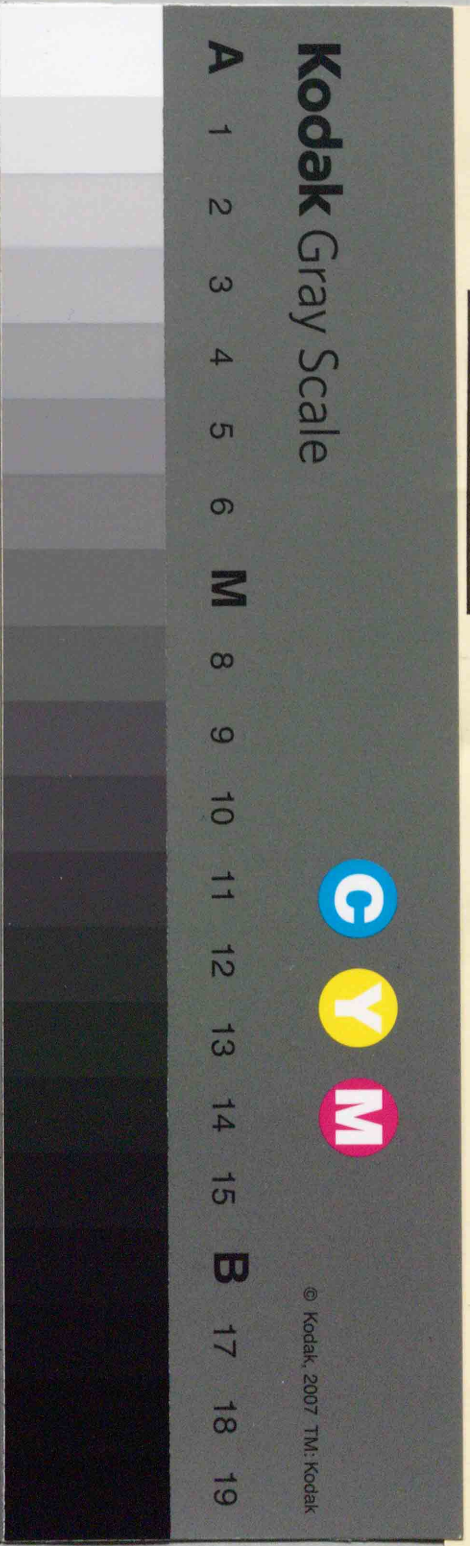
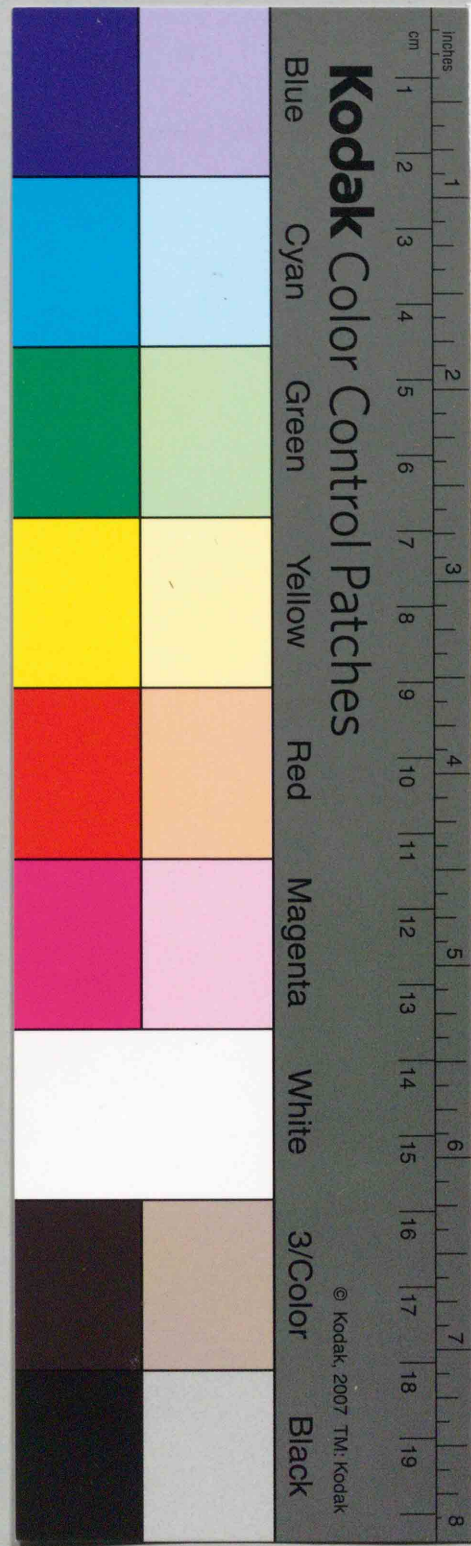
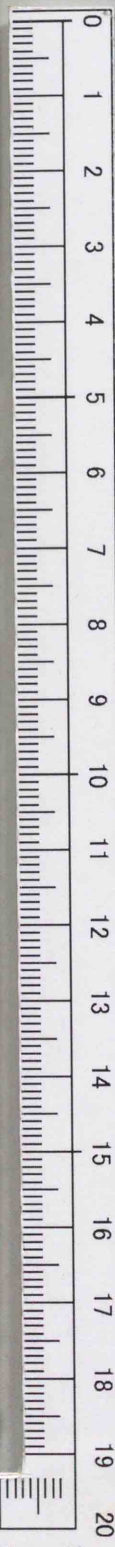


井上女子修身教科書
卷二

4b
110
大15



40625
教科書文庫
4
110
42-1926
20000
173494



4b
110
大15

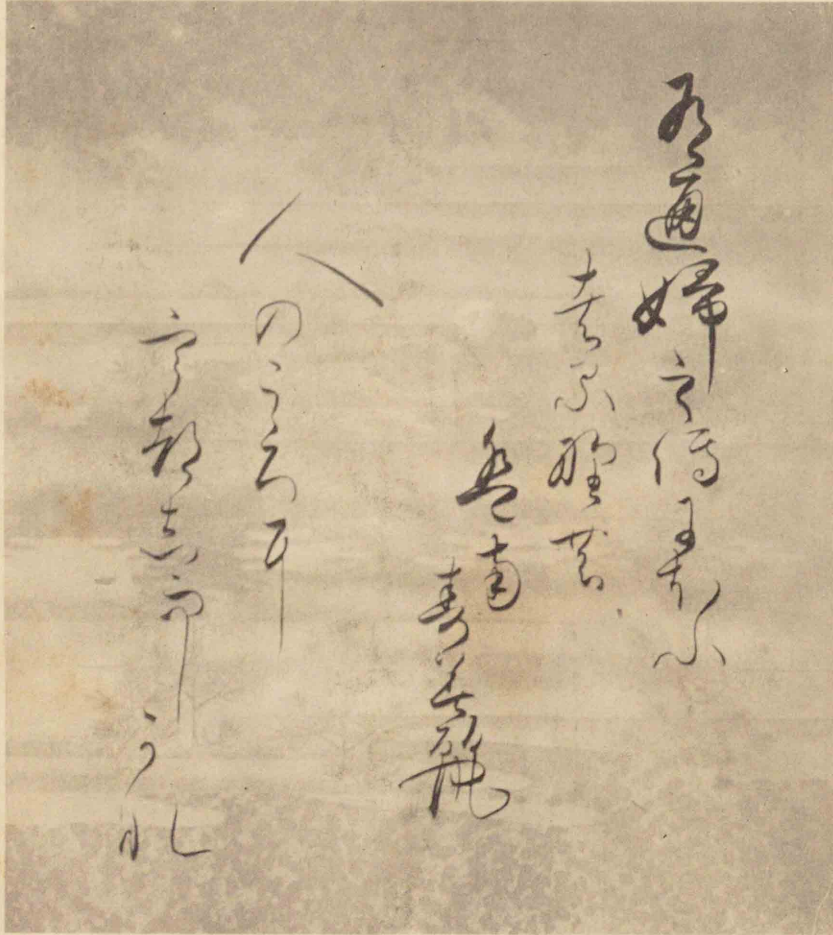
資料室

日七十二月一年五十大
濟定檢省部文

文學博士井上哲次郎著

井上女子修身教科書

東京 金港堂書籍株式會社



歌御下陸后皇

第一に心を誠とする。
三詔勅を去るるが心にあらはれる。
入学式の際の枝七の語せし十箇條。

勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ
樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億
兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國
體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民
父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉
己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ
智能ヲ啓發シ徳器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ
開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義

勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

詔書

朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼此相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニス朕ハ爰ニ益國交ヲ修メ友義ヲ悖シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ賴ラムコトヲ期ス顧ミルニ日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニセムトスル固ヨリ内國運ノ發展ニ須ツ戰後日尙淺ク庶政益更張ヲ要ス宜ク上下心ヲ一ニシ忠實業ニ服シ勤儉產ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誠メ自彊息マサルヘシ

抑我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我カ光輝アル國史ノ
成跡トハ炳トシテ日星ノ如シ寔ニ克ク恪守シ淬礪
ノ誠ヲ輸サハ國運發展ノ本近ク斯ニ在リ朕ハ方今
ノ世局ニ處シ我カ忠良ナル臣民ノ協翼ニ倚藉シテ
維新ノ皇猷ヲ恢弘シ祖宗ノ威德ヲ對揚セムコトヲ
庶幾フ爾臣民其レ克ク朕カ旨ヲ體セヨ

御名御璽

明治四十一年十月十三日

内閣總理大臣侯爵 桂 太 郎

詔書 精神の作興の詔書

朕惟フニ國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ之
ヲ涵養シ之ヲ振作シテ以テ國本ヲ固クセサルヘカ
ラス是ヲ以テ先帝意ヲ教育ニ留メサセラレ國體ニ
基キ淵源ニ遡リ皇祖皇宗ノ遺訓ヲ掲ケテ其ノ大綱
ヲ昭示シタマヒ後又臣民ニ詔シテ忠實勤儉ヲ勸メ
信義ノ訓ヲ申ネテ荒怠ノ誠ヲ垂レタマヘリ是レ皆
道德ヲ尊重シテ國民精神ヲ涵養振作スル所以ノ洪
謨ニ非サルナシ爾來趨向一定シテ效果大ニ著レ以
テ國家ノ興隆ヲ致セリ朕即位以來夙夜兢兢トシテ

能率
思
之
中
に
仕
る
に
由
り

常ニ紹述ヲ思ヒシニ俄ニ災變ニ遭ヒテ憂悚交至レ
リ
輓近學術益開ケ人智日ニ進ム然レトモ浮華放縱ノ
習漸ク萌シ輕佻詭激ノ風モ亦生ス今ニ及ヒテ時弊
ヲ革メスムハ或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル況ヤ
今次ノ災禍甚タ大ニシテ文化ノ紹復國力ノ振興ハ
皆國民ノ精神ニ待ツチャ是レ實ニ上下協戮振作更
張ノ時ナリ振作更張ノ道ハ他ナシ先帝ノ聖訓ニ恪
遵シテ其ノ實效ヲ舉クルニ在ルノミ宜ク教育ノ淵
源ヲ崇ヒテ智德ノ竝進ヲ努メ綱紀ヲ肅正シ風俗ヲ

匡勵シ浮華放縱ヲ斥ケテ質實剛健ニ趨キ輕佻詭激
ヲ矯メテ醇厚中正ニ歸シ人倫ヲ明ニシテ親和ヲ致
シ公德ヲ守リテ秩序ヲ保チ責任ヲ重シ節制ヲ尙ヒ
忠孝義勇ノ美ヲ揚ケ博愛共存ノ誼ヲ篤クシ入りテ
ハ恭儉勤敏業ニ服シ產ヲ治メ出テテハ一己ノ利害
ニ偏セスシテ力ヲ公益世務ニ竭シ以テ國家ノ興隆
ト民族ノ安榮社會ノ福祉トヲ圖ルヘシ朕ハ臣民ノ
協翼ニ頼リテ彌國本ヲ固クシ以テ大業ヲ恢弘セム
コトヲ冀フ爾臣民其レ之ヲ勉メヨ

御名御璽

攝政名

大正十二年十一月十日

國務各大臣副署

井上女子修身教科書 卷二

目次

第一課	反省	一
第二課	少女の美德	五
第三課	社會の半分	一〇
第四課	恥づべき恥	一四
第五課	中庸	一八
第六課	一家の平和	二三
第七課	事の大小	二六
第八課	協同	三一
第九課	正義	三四

目次

第十課	寛大	三八
第十一課	親切	四二
第十二課	慈善	四六
第十三課	公德と公益	五〇
第十四課	物事の真相	五五
第十五課	誠實	五九
第十六課	克己	六四
第十七課	表裏	六八
第十八課	自重と謙遜	七一
第十九課	褒め誹り	七七
第二十課	質實剛健の徳	八一

目次終

誠の精神

三詔勅の暗誦

入字式の際の十箇條

健康十五年一度の守るべき五箇條

報恩 尊長

従順 報恩

勤勉 克己

質素 勤勉

親切 又 反省

辛抱

尊長

自重

井上 女子修身教科書 卷二

文學博士 井上哲次郎 著

第一課 反省

月日に關守なく入學後早くも一箇年を経過せり。我等試に一學年の時代を回顧せん。我等は果してよく一貫して入學當初の心得を失はざりしか、豫期の如く勉學したるか、生徒たる本分に戻る所なかりしか、日々の言行に日新の進歩を認め得たるか。

花の春
紅葉の秋の反省
過ぎたるは
及べりけり
孝經
曾子の著
言葉もあはれ
散らさるる
昭憲皇太后御歌
かこうましかば
白玉の眞玉は
火にもやの小ざりけり

凡そ學徳上に於て進歩發展せんとするものは、必ずやかくの如き反省を爲さざるべからず。われ日に三たび吾が身を省る。といひしは曾子なり。(孔子の弟子)かくの如くにして始めて曾子の學徳を見るべし。年若きものはたゞに世の經驗少きのみならず、血氣に驅られ、進んで爲すに急にして、退いて考ふるに怠り易きが故に、往々にして正邪善惡の判断を誤ることあるを免れず。かつ何人も種々の性癖缺點を有するものなれば、若し反省すること無からんか、おのづから、おのれ不徳と感ぜずして其の

カ5
節制
沈黙
規律
決心
儉約
勤勉
至誠
正義
中庸
清静
平静
潔行
謙遜

己を知るは難し
明治天皇御製
おのが身はかへりみずしてかともすれば人のうちへのみいふ世なりけり
皇后陛下の十二徳

實不徳に陥ること多かるべし。ことに人は巧に他人の缺點を見出せども、とかく己の缺點には心付かぬものなり。又たとひおのれに過失あり缺點ありと知るも、何等かの理由を附しておのれを辯護し、自ら善しとする弊多きものなり。かゝる弊ははやくこれを矯むるにあらずして、如何でかよく徳に進むを得ん。孔子曰く君子はこれを己に求め、小人は之を人に求むと、宜なるかな。
知らずして過てるは、さほど咎むべきにあらざ

過過ぎたるは
及及ばずなりけり
かりそめり
小人の過過や必必ずずかざるかざるなりなり（子夏）
敬敬之之をを守守るるん

反省の機

節制
花の春
紅葉の秋の至至て
はとくはとくにこそ
くま、ほしけり

れども、過ちて尙ほ過ちたることを知らず、又過ちたりと、知るも、尙ほ欲情にかられて、之を改めざるときは、ますます、邪惡に趨くものにして、之を改めざるのみか、尙ほ其の過を飾り非を遂げんとするは益、其の過失を大ならしむるものなり。最も惡むべし。

反省の機會は常に存在するものなれど、中にも日々のことは其の夜眠に就かんとする前、毎週のこととは土曜日の午後、各月のことは其の月の末日、一年のことは歳末に於てすべし。

反省の標準

總總て其の所
有物有物は置置て
くべき所くべき所は
あり、
徳徳をを修修むむるるは
はるはるににけけんんをを
まますす時時にには
人人心心同同じ
からからず

反省をして有効ならしめんとせば、標準となるべき項目を定むるをよしとす。フランクリンが十三徳を立てたるが如き、曾子が「人の爲に謀りて忠ならざるか、朋友と交りて信ならざるか、習はざることことを傳傳ふるか、を項目となしたるが如き、或は所謂座右銘座右銘を定むるが如き、いづれもみな以て吾等の軌範とすべきなり。

第二課 少女の美德

今日の日曜日をいかに過すべきかと相談する

人々の長所

時、弟は魚釣りに行かんといひ、妹は花摘みに行かんといひ、又兄は後の山に茸狩を試みんといふ、我はそれのいづれにも従ふ能はず、衆議遂に一決せずして止めり。斯くの如きの例尙ほ他にも多々あらん。

およそ人毎に好悪を異にし意見を同じうせざることとは、其の人々の年齢境遇等の差にもより、男女の別にもよる。少年には少年の特色あり、老年には老年の特色あることは勿論なり。故に人は各其の自らの特色を知りて長所は之

無邪氣

多
け都
手良字
慣れ

元氣

を進め短所は之を補はざるべからず。これ反省の要旨なり。然らば少女の特色如何。

少女は無邪氣にして飾らず偽らず氣取らず、常に眞率なり。眞率なるが故に、正直なり誠實なり、行爲に表裏なく言行多くは一致す、これ少女の美德なり。されど短所も亦これに伴ふ。遠慮無きに過ぎ、狎れ易さに過ぎ、露骨に過ぎ、不作法に過ぐることは是なり。

元氣に満てるは少女の美點なり。運動をも氣

輕に爲し仕事をも躊躇せずして行ふ。而して弊も亦伴はざるにあらず、事を爲すに考の足らざることなり、忍耐力の乏しくて成效を見ること少きことなり。

快活

快活も亦少女の美德なり。常にこゝとし、て物に屈託なく氣苦勞なし。望みは胸に満ちみちて前途さながら洋々たり。されど缺點も亦これより起る。人の困難に同情する能はず、事に對する眞面目なる能はず、浮薄に陥り滑稽に流るゝ如き是なり。

柔和

少女の美德にして最も缺くべからざるは柔和なり、溫良なり従順なり。而して其の心根のやさしく、よく長上の命に服し、其の言葉おだやかに其の行しとやかなるを要す。これ寧ろ一般女子の美德と稱せらるゝものにして、世の波風にもまれざる少女に於て殊に其の著しきものあるを見る。然れども、これに伴ふ弊風亦無きにしもあらず。やゝもすれば物に臆し、事におぢて盲従に流れ、他人の威壓に屈し易きことあるが如き是なり。

凡そ少女にして眞率元氣快活柔和の四徳を缺

くものあらんか、恐らく其の身心に缺くる所あるの結果ならん、深く省みざるべからざるなり。而して長所は必ず之に伴ふ短所を有す。よく其の長所を取りて其の短所を捨つるを得るは偏に修養の功によらずんばあらず。

第三課 社會の半分

世界いづれの國に行きても必ず男子ありて又女子あり、而してその數殆ど相等し。かくの如く社會は男女より成り、社會の半分は女子なるが故

其の數等し

女子教育の今昔

に、社會は男子のみのものにて無く、又女子のみのものにて無く。結局兩性の協同によりて社會は維持せられ、又その進歩をも見るべきなり。昔は男子の進歩をのみ圖りてそれにて事足れりとなし、女子の教育は少しもこれを顧みざる時代ありき。今日に於ては世界各國此の風をわらしとなし、男子と同様女子の教育にも心を用ひ、女子の地位を高むることに力を致せり。我等も幸にかゝる時代に生れて學校に入りたるなれば、只この上は男子に劣らぬ決心を以て善良なる人た

働く方面

らんことを期せざるべからず。
かく心掛に於て男女に優劣あらざれども、もと男と女とは其の體も心も同一ならざるが如く、男女の働く方面は自ら異ならざるを得ず。もし強ひて同一の仕事をして同一の働きを爲さんとせば、徒に失敗と不幸とを招き、他人に對しても亦種々の迷惑を掛くるに至るべし。妻となりて夫を助け一家を整ふるも、女子天職の一なり、母となりて子女の教養を遂げ善良なる國民を社會に送るも、女子天職の一なり、社會の事業に働きて社會民

衆の爲に奉仕するも、女子天職の一なり、社交を巧みにして一家一國乃至國際の平和の爲に働くも、亦女子天職の一なり。その他女子の地位の高まるに従ひて、女子活動の範圍も亦次第に廣まり行くものと知るべし。

かくの如く女子活動の天地次第に開くることとなれば、女子の修養もこれにつれて高く且つ深からざるべからず。大いに身體を強壯にし、智能をみがき、徳性を養ひおきて、他日此の天職を十分に成し得るやう、今より心掛けおかざるべからず。

徒に女ですもの、「女のくせに」など自ら卑下して爲すなきに終はることあるべからず。

第二女子期

第四課 恥づべき恥

人の前に出でたりとて恥ぢ、人に物を問はんとて恥ぢ、人に物を問はれたりとて恥づるは、年若き女子に屢見るところなれども、これらは果して眞に恥とすべきことなりや。

恥を知るは人の禽獸と異なる所以の一なれども、恥づべき事を恥ぢずして恥づべからざる事を恥

少女は恥しがらる
人は恥なかるべからず。
(孟子)
羞惡の心なきは人にあらざる。
(孟子)
恥を知るは人の禽獸と異なる所以の一なれども、恥づべき事を恥ぢずして恥づべからざる事を恥

人前に出づるは恥

身のかはてよいか知らむ人知れぬ心ならずば

問ひ問はるは恥

づとすれば、畢竟恥を知らざるに等し。人前に出でては人々より一々おのれの坐作進退につきて注目せらるゝが如く思はれ、何となく心おくれ、氣恥かしきは、一應無理もなきことなれども、作法詞遣に缺くるところなくば、何ぞ恥づるを要せん。人に物を問ふを恥とし、又問に答ふるを恥とするも、甚だいはれなきことなり。宇宙は廣く萬物は衆し、人の知らざること解せざること限りあるべからず。如何なる大學者も尙ほ知らざる事項

孔子は
大廟に入つた時
神官は
尋ねた。
之礼なり
と人が諒する時か

夏休みの
よるをす

我が過を
恥づるは

多く、解せざる問題多きを思へば、年若き生徒の知らずして問ひ、問はれて解せざることあるは、何の不思議かある。問ふは一時の恥、問はぬは末代までの恥といへども、學生が教師に問ふは一時の恥にもあらず。寧ろその恥づべきは何の疑をも起さず、何の問をも出さざるにあり。即ち眞面目に物事を考へざるか、考ふるも之を解決せんと努めざるの結果なればなり。

他人より我が缺點を指摘せられ我が過失に注意せられて恥かしと思ふは人情なれども、これ亦

ものくば
唇寒し秋の風
人の缺點もよく
ことばさけさる
人の欠点もよく
己の長さを
い子なわれ
鎌倉時代
には人にあ
金をかりて
もの期日迄
かゝるなれ
たう世の利であ
第四課 恥づべき事

必ずしも恥となすべからず、人は神にあらず、聖にあらず、缺點あり過失あるは其の常なればなり。寧ろ恥づべきは過を再びせざるの心なきにあり。他人の忠言を容れず我が過を改めんとする心なきにあり。修學の途中にあるもの、未熟なるは當然にして他人より注意せられたるが爲に偶、自己の缺點に心付くを得たりとすれば、それだけ一歩安全に近づけりといふべし。喜びこそすれ、恥づべきにあらず。すでに其の缺點のあることを知りたる上は進んで之を如何にして矯正すべき

第四課 恥づべき事

かにつきて人に問ひ質すべし。かゝる心掛を有せんか、向上進歩は未だ必ずしも期し得べからずとせざるなり。

第五課 中庸

身長（はた）の短きを厭ふものも七八尺の高きを希ふにはあらず、體重（しん）の多きを嫌ふものも五六貫の輕きを望むにはあらず。日本の女子は身長平均は四尺九寸體重平均十二貫なれば略之に近きを善しとし、之より小なるは勿論、大なりとも極端なる

支那で
は中と
云ふ
中庸
孔子の
孫子
思ふ
こと
なり

適度の飲
食運動

を悪しとす。もし身體に大小長短ありとも、多くは生得にて復た奈何ともすべからず。されど、この外自己の力にて中庸を保ち得ることは務めて之を保つべし。
過食して胃腸を害ふは、もとより宜しからず、されど少食に失して榮養不足となるも亦害あり。運動を怠りて身體の發育を圖らざるは不可なれど、さればとて勞苦に過ぎて心身の疲勞と衰弱とを招くに至るも亦褻むべきことにあらず。すべて飲食運動を適度にして身體の健康を圖るべし。

程よき勉

奢侈と吝

眞の質素

怠惰は徳の賊なり。何事にも奮勵努力せざるべからず。さればとて勉強其の度を超えて心身の健康をきづつくるが如き、思はざるものなり。金錢を浪費して奢侈に流るゝは宜しからずといへども、金錢を尊ぶの餘り貯蓄を事とし、公共の利益にも一身の向上にもこれが使用を惜むは吝嗇といふべく、共に節儉の美德に反するものなり。流行を追ひて華美の風を爲すは最も嫌ふべしといへども、強ひて時の流行に逆うて身なりを装ふことを忘るゝ如きは、意地悪き人とも見え、世の

多辯と沈黙

漸進

中を知らざる人とも思はれ、或は故らに質素を銜ふ如くに見えてよろしからず。わが身分とわが家計とにふさはしき身なりを爲すべし。決して質素の徳に反するものにあらざるなり。多辯の害あることは何人もこれを認めざるはなし。されど沈黙も其の度を過ごして要あるとき、臆していはざるが如きは、過ぎたるは猶ほ及ばざるが如しともいふべきなり。保守に偏して進歩せず向上せざるは頑冥にしていふに足らざれど、さりとして急進に過ぎて突飛

姑(急) 保

に出で事の前後次第をさへ辨へざるが如きは却りて輕忽にして賤むべきものなり。事理に訴へて漸進するを最上の策とすべし。

よき程

此の外何事にも皆よき程といふことあり。よき程を知りて言ひ、若くは行ふは、經驗を重ね常識を積み而して修業を加へたる後のことなり。始めより能くすべきところにあらず。我等は未だ年少にして此の域に達せず、恐らく事毎に或は過ぎ或は及ばざること多からん。宜しく深く我が身を顧みて中庸の道を失はざらんことを期せざ

仰る魂於天術

ふ能於人之術

也徳天下英才

而教育之

也

なつかし
我が家

るべからず。

第六課 一家の平和

如何ほど面白き處に行き如何ほど立派なる生活をするとも、明け暮れなつかしく思ひ浮べらるゝは我が家なり。其の異なる土地の風物に暫しは心を奪はるゝこともあらん、されど忽にして矢も楯もたまらず我が家庭の慕はるゝに至るものなり。世界廣しといへども我が家ほど好きものはなし。他國に在りて久しぶりに我が家に歸り

孟子曰君子有

樂而天下

在焉父

弟無故

樂也

自然の情
親の愛

たるとき嬉しさを思へ、幼き時に立ちかへりて暖き母の膝に抱かるゝ心地やすべし。
我が家庭は、我の生れたる處にして又我の成長せる處なれば、之を慕ひ之を愛するは自然の情なり。人にして此の情なきは不幸なる境遇の然らしむるものにして、恐らくは其の品性の上に多少の缺點あらん。

我が家庭を慕ひ、我が家庭を愛するは善きことなり。
愛國心も其の源をたづぬれば、亦家庭を愛するの心に始まる。されど吾等は國を愛すると

一家の平和

共に國に對して盡さざるべからざるが如く、家庭を思ふと共に、家庭に對して盡すところなかるべからず。
家庭に對して盡すべきは、一家の平和を圖るを以て第一とす。家庭は家族の安息所にして此處に入れば、苦勞もなく心配も去るべし。これ一家の内常に穩かにして、此の平和に接すれば、恰も氷雪の春風にとくるが如くなるに至る。若し然らずして家族の間に不和を生ぜんか、家庭は忽ち荒涼となり、各不快の感を抱きて遂に慰安を求むる

に處なかるべし。されば家族は互に親愛の情を盡して一家の平和をはからんことを務むべし。親愛の情を盡すとは他なし、父母は慈愛に富み、子女は孝心深く、兄弟は弟妹を愛し、弟妹は兄弟に悌順を致し、各其の道を守るにあり。かくの如くすれば我が一家は快樂を以て充たされ、粗衣を着くも楽しく、粗食を食ふも甘く、あだかも風暖にして花咲き鳥歌ふ春の心地せらるべし。

第七課 事の大小

大事の先は
小事の後に
沈着
小なるも
軽んずる

小積んで
大なる

小塵積つて山と
なる。

小事を
軽んずるか

百萬石の米といへども、粒の大なるにあらず、小き粒の集まりたるなり。千里の旅も一步より始まり、萬町の田も一鍬つつの功より成る。千丈の堤も蟻の穴より潰え、螢ほどの煙草の火の屢、大火の元となるを聞く。小事必ずしも小事ならず、大事必ずしも大事ならず。

されば小事を軽んずるものは遂に大事を成すこと難し。五錢拾錢の出入に意を用ひずして富を増さんとし、一語一句の記憶を怠りて國語英語に熟達せんとするが如きは、恰も木に縁つて魚を

求むるに似たり。

然るに人はとかく大事に心奪はれて小事を見のがしやすきものなれば、努めて意を用ひて、小事なりとも爲すべきはなし、爲すべからざるは爲さず、早く小事を見のがさる習慣を養ふべし。

古來大行は細瑾を顧みず、といへれど、あながちに大事を行ふものは細事小節に意を用ひずして可なりとのみ解すべからず、むしろ彼の小の蟲を殺して大の蟲を助ける。といふ義に解し、事に當りて、その得失大小を考へ之を行ふの先後を述べた

犠牲

家庭の取扱

小善より大善にす

るものと知るべきなり。女子の取扱ふ家事は多く一見小事とすべきことのやうなれども、その小事決して常に必しも小事ならざるなり。一さじの砂糖五六滴の醤油もその用ひ方によりては一家を喜ばしむべき料理の鹽梅を定むるにあらずや。肉眼にて見えざる彼の病菌は小の小なるものなり。然かもこれが消毒を怠る時は忽ち人命を失ふの惨事を惹起するにあらずや。されば決して小事を等閑に附すべからず。もし隣席の友の鉛筆を忘れたるあらば我等は

鉛筆を貸し與へん。墨汁にて机を汚したらば助
 けて共に之を拭はん、善の最も小なるものと雖も
 常に之を行ふときは其のやさしき心根は培はれ
 てやがて慈悲仁愛の大ともなりぬべし。朝寢の
 爲に遅刻したるに、家に用事ありし故なりと偽ら
 ば後には怠惰にて缺席しながら病氣の故なりと
 偽るも容易なるに至り、はては人を欺きて金錢を
 貪る悪事をも敢てするに至るべし。今日一善を
 行ひ、明日一善を行ふ、積みば大徳となり、今日一悪
 を行ひ、明日一悪を行ふ、積みば大罪となる。慎ま

道徳的勇
 正気
 浩然
 至
 格

ざるべけんや。

第八課 協同

協同の力
 百條の絲にても一條づつ引き切るときは、たやすく断つことを得れども、之をより合せて一つの綱となすときは、大力の人といへども引き切ること能はざるべし。協同の力の強きこと率ねかくの如し。かの綱引の勝負を見るに、引くものまぢまぢにして力を合せざる時は、強き人の多き組なりとも勝ち難し。

毛利元成
 一百万
 主張者
 一日万
 二百カマ
 ニシテ

一家其の
他の協同

徳川家康
の合戦
見物

協同の成
立

一家のことも之と同じく、家族おもひくゝに或る者は儉約を心掛くれども、或る者は贅澤を欲し、或る者は勤勞に従へど、或る者は遊惰に傾くといふが如くなれば、其の家果して如何なるべき、一家の繁榮は其の家族が盡く一心同體となりてよく其の道をつくすより來るものなり。其の他小は學級學校の事より、大は國家社會の事に至るまで皆然り、即ち校風の美と云ひ、國體の美と云ひ、一として協同の結果ならざるはなし。
若干の人一體の組織を成して働くときは之を

協同の心
掛

協同といふ。其の組織には必ず一定の秩序規律なかるべからず。人々皆其の秩序規律を守りて全體の組織成るなり。命ずるもの、命ぜらるゝもの、同等の地位にありて事を爲すもの、各よく其の分を守りて全體の爲に力を致さるべからざるなり。己れ一身の便利をのみ主とするが如きことありては、到底協同の事成り立つものにあらず。人はおのれの義務に忠實ならざるべからざることは勿論なれども、唯、單に己れ一人の義務を爲すばかりにては協同の事は十分行はるゝものに

雷同
悪い
一所
ふり
も
や
コ

あらず。人々互に相親み、相助け、常に其の團體全部の爲を思ひて力を捧ぐることを惜まざるやうせざるべからず。古人曰はく、「人と事を共にするに彼に快き事を擔ひ、我れ苦しき事に任ずれば、事は苦しくとも意は快し。我れ快き事を擔ひ、彼れ苦しき事に任ずれば、事は快くとも意は苦し」と。協同に關して最も必要なる心がけなり。

10. 28
第九課 正義

正義と義務

人々互に他人の幸福、利益を害せざるを正義と

借人付返す義務
貸人は取る権利
がある

いひ、この正義を守る爲に當に實行せざるべからざることを義務といふ。例へば人より金錢物品を借りたる時は、之を返却せざるべからざるは當然の義務なり。然らざれば人の利益を害すべし。詩人スコットは友人への義理として某會社の株主となりしに、後その會社破産の悲運に陥りし爲、スコットはいさぎよく我が財産全部を差出して負債に充てたり。然れども負債大にして尙不足なりしかば、これより氏は貧苦と病苦、勞苦と戦ひつゝ、根限り著作に従事し、遂によく之を返濟し

終り、靜に臨終の床に就きしといふ。自己の義務を怠りて他人の幸福利益を害するを不徳とせし努力奮闘、斃れて後已みしスコットの如きは眞に正義の士といふべし。

蓋し人は皆他人の我を害することを望むものなし。然らば我も亦他人を害すべからざるは誠に明白なる道理なり。孔子曰く己の欲せざる所を人に施すことなかれ」と。

我等は他人の幸福利益を害せざると同時に他人に對しても亦我が幸福利益を害せざること

正義を
行ふは
義務と
權利が
ある。

權利
義務

權利
義務
を
重んず

正当防禦

大切である。

寛大
權利を
主張す
べからず

要求す、これを權利といふ。權利義務は共に正義の命ずる所なり。されば若し人あり我が身體名譽財産に害を加ふるものある時は、正当の手段に訴へて之を防ぐは少しも妨げなきことなるのみならず、却つて正義を完うする所以なり。但し斯る場合に我は、只防禦の地位に立つを以て足れりとすべし。

こゝに注意すべきは義務は必ず實行せざるべからざるものなれども、權利は必ずしも然らず。之を實行すると否とは其の人の意志の自由によ

ることなり。權利は時としては之を放任して恥
とならざるのみならず、人その寛大の徳を稱し、わ
が品位を高むることあるものなり。

第十課 寛大

人は己の短所に氣づかず、能く他人の缺點を見
出すものなるが、常に自分の事を棚にあげて人の
事のみを咎めだてする時は、一家の中といへども
和合せんこと難かるべし、況んや社會衆人の間に
於てをや、恐らく紛争の絶ゆる時なかるべし。

寛大の要

人を責むる心
を以て己を責
め己を恕する
心を以て人を
恕す。

我能く人を容
るれば人は我
りが範圍に在

人心の相同じからざる、なほ其の面の如し。社
會は此の千差萬別なる人々の協同してつくれる
ものなれば我が心を廣く持ちて人に過ありとも
之をゆるし、人の我に心好からぬ事をなすとも之
を善意に解することを勉めざるべからず。

己の身を持つること、よし清くとも、人の些かな
る過失を寛恕する能はず、いつまでも之を根にも
ち折にふれて之を咎めだてんとするものあり。
尚ほ甚しきは我と氣質趣味信仰意見等を異にす
るの故に毛嫌して之を疎んじ斥くるものあり。

みを誤れるの大なるものとす。寛大の徳なきものは人なつかず、我が思ふ様に召使ひ得るが如き婢僕さへ權威のみにては取扱ひ難きことあるものなり。

女子と大

女子は多く家にあり交際せまきを以ておのづから其の心狭く、よく人を容るゝ能はず、猜疑嫉妬邪推等の爲に温和優美なるべき其の本來の美德を毀くることなすとせず。注意して度量を廣くするやう心掛けざるべからず。

廣き心を持て

むつとして歸れば門の柳かな。寛大はかへりて

西郷隆盛
人を相手にせず
天を相手にせず

人を服せしむる本なり、古語に寛なれば衆を得といへり。社會衆人の間に立ち交らひては、一日もこの徳を缺くべからず。泰山は土壤を譲らず、故に能く其の大を成す。河海は細流を擇はず、故に能く其の深を就す。人たるものはよろしく寛大にして百川の注ぐに任せ清濁あはせ吞みて以て衆人とともに生活を樂しむの工夫をかるべからず。

明治天皇御製

浅みどりすみわたりたる大空の

ひろきをおのが心ともがな

親切の要

実行す

親切
辛抱

第十一課 親切

人の此の世にあるや、我が爲すべき事をなし、爲すべからざる事をなさず、他人を害せず、他人の利益を妨げざるのみにては未だ十分ならず、更に進んで他人の爲に善からんことを希ひ、他人に對して親切を盡さざるべからず。諺に「旅は道づれ世はなさけ」といへり。かく互に親切を盡し合ひてこそ、人々の間に温みの湧き出で、世の中はおのづから春の如く長閑になりゆき、相互の幸福も加

親切に
喜ぶ
嬉し
さ

はるなれ。

知らぬ地に路を迷ひて人に親切に教へられたる、氣分の俄に悪しくなりたる時、薬など取り出でて懇ろに介抱せられたる、身に染みて嬉しきものにて大方の人のすでに經驗せるところなるべし。人に親切にされて我が嬉しく感じたるものは、人に親切を盡して其の人の心より喜ぶを見る時の我が嬉しさの更に大なるものなることを味ふべし。おのが一身を抛ちて人を救ひ、大金を費やして人を助くるが如き、大なる親切を要する場合は

誰にも親切

常に起るものにあらず。平生の心掛だにあらば、手數もかゝらず、暇も費やさず、いと手輕に親切の盡さるゝものなり。湯ける人に一杯の水を與へ、路に迷へるものに詳しく教へ、倒れたる子供を抱きおこす等、日夕起るべきことなりとす。
親切は家にありて父母長上に事へ、弟妹婢僕を世話し、學校にありて教師學友に接する時に限らず、名も知らぬ他人、外國人といへども、機會だにあらば之れに對して之を盡すべきものなり。知らぬ人なり外人なりとて、之を輕蔑し敵視するが如

國の爲にあだなく、仇はつくしむべし、事なきを忘るべし、
明治天皇御製

きは、修養ある文明人のなすまじきこととす。

親切は人類の間にのみ限るべからず、之をおし廣めて動植物にも及ぼすべし。動物の生を欲し死を避くる敢へて人間に異らず、之を思へばたとひ一匹の小蟲といへども、害蟲にあらざる限りは、故なくして之を虐待し益無き殺生をなすべからず。誠に牛馬其他の家畜にありては我が家事の一部を分擔する家族同様のものなれば、之を殘酷に取扱ふは人情の最も忍びざる所とす。植物は知覺の反應動物の如く明かならざれども、亦天地

の間に生を亨け之を樂しむものなれば、妄に之を害ふべからず。用もなきに枝を折り花を摘むは、啻に天然の風致を損ふのみならず、其の人の心根もすさみ行くものなり。すべて動植物に對して殘酷なるものは、人に對しても亦殘酷なるが如し。

第十二課 慈 善

人は他人に對して親切を盡すに止まらず、尙ほ更に進んで世の貧弱なるものを恵み、不幸に苦めるものを救はざるべからず。

慈善の要

人生の榮枯盛衰は多く各人の賢愚強弱に由るものなれども、又必ずしも然らざることあり。中には火事、水難、飢饉等意外の災難に遭ひて、不幸なる境遇に陥り、鰥寡、孤獨、癡疾、不具（年若くして親なき者）の者となりて生計の道を失ふものあり、かくの如きは全く不運の致す所にして、其の人に何の罪とがありての故にあらざるなり。されば志あるものは此等の人々に對しては十分の同情をよせて出來得る限り之を救助すべし。彼の孤兒院、感化院、慈惠病院、赤十字社等の設あるは、すべて此の趣意に基けるもの

慈善を行
つぎに注
意する

なり。
然れども慈善を行ふにも其の方法よろしからざれば、かへりて恵まれたるものをして恩恵に狎れしめ、依頼心を増長せしめ、益之を怠惰に導くことあるのみならず、或は累を我が身に及ぼすことあり。されば場合によりては金品を與ふるよりも職業を授け之を勵まして獨立心を起さしむるを可とすることあるべし。慈善を行ふにあたりては、よく先方の身分を調べ之を行ふの結果につきて考ふる所なかるべからず。又慈善を行ふに

慈善は物
の多少に
よらず

勤機
行ひをする
もの心
結果

は己れに關係の近きものを先にし、次第に遠きものに及ぼすべし。勅語に「博愛衆ニ及ホシ」と仰せられたるは蓋しこの謂ならん。
慈善は金錢物品の多少によるにあらず、己れに分^のに相應したる慈善をなさんことを心掛くべし。長者の萬燈よりも貧者の一燈といふ諺あり。財産乏しきものは場合によりては勞力を以て其の志をいたすも可なり。慈善に貴ぶ所は其の志にあり、内心忍ぶ能はざるの念に基くの慈善をなさざるべからず。若し慈善をなすことによりて己

の名をあらはさんとし、又己を利せんとするが如きは、たとひ多大の財物を施すとも、謂ゆる偽善にして眞の慈善といふべからず。

第十三課 公德と公益

公德とは
何ぞや

電車、汽車等にて己れ獨り廣き席を占め、他に譲らざるが如き、多人數込み合ふ中にて人を押しつけ自ら先んずるが如き、或は路上にて往來の妨げとなるべき遊戯などなし、又は道路溝渠に不潔物を捨つるが如き、或は公衆の前にて見苦しき風を

なし、又は卑猥なる談話をなすが如き、傳染病を隠すが如き、他人の安眠を妨ぐるが如き、其他、公園の樹木を折り、建物に樂書をなし、圖書館の書物を汚す等、すべて一般公衆の迷惑となり又不利益となるべき事を行ふべからず。これ吾等が社會の一員として共同生活を營む以上一般公衆に對して守らざるべからざるの徳義なり。

● 學校に在りて學友の妨になるべき事をなさず、又校舎校具等を大切にすることは生徒としてよく公德を守れるものなり。

公德の程度

西洋諸國にては公德頗る發達したれども、我が國にはとかく一身一家の爲のみ思ひ、一般公衆の事を顧みざるもの多し。およそ社會文明の程度は公德の發達如何によりて推知せらる。すなはち公德を重んずるは、常に我が一身を貴くするのみならず、また社會全般を高むる所以なり。而して吾等は社會公衆に對して其の迷惑となるべき事をなさざる様注意すると、同時に進んで其の利益幸福となるべき事を爲す様心掛けざるべからず。彼の學校を建て圖書館を設け、病院を

公益とは何ぞや

開き、道路をつくり、川をさらへ、橋をかけ、荒地を開墾し、惡疫を豫防し、有益なる圖書を著作し、便利なる器械器具を發明するが如き、皆公益を廣むる所以のものなり。

公德をなす機會

大なる事業をなして廣く社會を利せんには學問と財産との力に頼ることも大なれども、我が家の周圍道路に落ちたる硝子屑等を拾ひ溝渠を浚へ、不潔物を去るが如きはさして難事にあらず、何人も心掛次第にして爲し得ん。心掛如何によつて學校にありても學校の事、級の事、校友會の事等、

女子と公益

すべてこの公益を廣むるの精神を養ひ事業をなすを習ふの機會とならざるはなきなり。
女子は多く家の内にあり。一見公益の事に關係少きが如しといへども、其の實大に然らず。一家の主婦となりて夫を助け、又は子女を教育して有爲の人となし、此等をして公益の爲に働かしむるも、勤儉産を治め、公共の爲に金品の寄附をすることを容易ならしむるも、善良なる風俗を維持して一般世間の安寧幸福を増さしむるも亦尊き公益の事業なりとす。

物事の真相を知るに容易なるか

第十四課 物事の真相

我が傍にありて我が手習ふを見居たる人の、たまく、笑ひ出したりとせんか、誰しも必ずや「我が文字の拙きを嘲りたるよ」と腹立たしく思ふなるべし。笑ひたる人の不作法なるはいふまでもなけれど、其の人の笑ひたるが、果して我が文字の拙きを嘲りたるなるか、未だ俄に判ずべからざるなり。
或は其の人ふと何事をか思出し、可笑しさに堪

早合點す
べからず

へずして笑ひたるにあらざるか、或は我が手つき
身振に可笑しき節あるを笑ひたるにはあらざる
か、笑ひたる事實に疑ひなければ、其の原因は那
邊にあるか、未だ容易に判定し難し。
もし我が推定の當らざるに、早くも怒り恨みる
ことあらんか、責むべき過失は彼にあらざりて
我にあらん。人の噂を聞きて、とありかくありと
信ずるも其の軽々しきこと、この過失に類せり。
ましてや之をまことしやかに他人に語り傳ふる
に至つては其の罪更に大なりといふべし。

噂と針小
棒大

總べて人の心は複雑なるものにて其の真相は
容易に他人の伺ひ知るべくもあらざれば、軽々し
く之を解釋し、妄に之を云爲すべからず。教育なき
婦女子は事實の真相を究めずして人の噂をなす
を好めども、之れ要なきに時間を費やして徒に他
人の感情を害ふのみ、速に改むべき悪習なりとす。
我が見聞せる事實を他人に語るには事實をあ
りのまゝに告ぐる様心掛くべし。我が意に任せ
て或は小さく或は大きく變更するが如きことあ
るべからず。「針程の事を棒程に云ふ」といへる諺

は、我が話に面白味をつけて人の注意を惹かん爲に誇大に言ひ觸らすの悪風を指せるなり、注意せざるべからず。

甲の話の話を聞きてこれを乙に語り、乙は更にこれを丙に傳ふる場合に於て、其の話は次第々々に尾緒つきて大きくなり、事實と遠ざかり行くものなり。西諺に「蟻垤を山となし、蠅を象となす」といへるはよく穿てり。其の話柄にして罪無きものならんには、或は一時の座興として聞き流しもすべけれども、事の重大なるものならんか、又人の一身

上にかゝるものならんには、其の人を迷はし人を誹るの罪惡、決して恕すべからざるなり。

思はざるの甚しき者に至りては誇大して語るをさほどの悪事とも考へず、誇大して語らざれば語るに張合なしとさへ思へり。かくの如きは啻に他人を害するのみならず、我が品位を損じ遂におのが信用をも墜すに至るべし。深く慎まざるべからず。

第十五課 誠 實

誠實とは
如何

善と知りて行はず悪と知りて改めざる、これを自ら欺くといふ。善と知れば必ず行ひ、悪と知らば必ず改む、これを自ら欺かずといふ。あたらしき心を持ちながら其の心の命ずるところに随はず自ら欺きて何ぞよく立派なる人たるを得ん。自ら欺くものは心に誠實の足らざるものなれば、またよく他人をも欺き偽るべし。言に偽あり行に陰日向あり、他人を欺くものは、これ人を害ふものにして悪これより甚しきはなし。たとひ巧言令色によりて一時世上の信用を博し名利を獲と

至誠人を
動かす

も、内は良心に責められ、外は他人を憚り、不快と苦痛とは常に心からみて離れず、幸といふべけんや。心誠にして自ら欺かず人を偽らざれば、常に内に顧みて少しのやましきことなく、彼のいはゆる仰いで天に愧ぢず、伏して地に忤ぢず。公明正大、心中おのづから春風の長閑けきが如く、楽しく安らかなり。孟子曰く、身に反して誠なれば、樂これより大なるはなし。と宜なるかな。誠實は正直に似てそれよりも尙ほ一步進みた

るものなり。即ちたゞに他人に對して言行に偽りなきのみならず、我が心に問うて偽りなきものなれば、言行終始一貫してかはらざるものなり。故に誠實なる人はたゞに己れを安んじ人の信用を得るのみならず、人を動かすの力大なるものなり。孟子も「至誠にして動かざる者は未だこれあらざるなり」といへり。若し己れ誠實を盡したりと思ふとも、人我を信ぜず、我が言用ひられざることありとも、決して人を恨むべからず。これ未だおのが誠の足らざるなりと思ひて益、誠實を盡す

誠實は道徳の根本

べし。

明治十五年一月四日陸海軍人に下し給へる勅諭に「心誠ならざれば如何なる嘉言も善行も皆うはべの裝飾にて何の用にかは立つべき。心だに誠あれば何事も成るものぞかし」と宣へり。誠實を以て君に仕ふれば忠となり、親に事ふれば孝となり、夫に事ふれば貞となり、朋友に對すれば信となり、誠實は萬善の源なり。古歌にいへり、「心だに誠の道にかなひなば祈らずとも神や守らん」とまことに然り。

克己は道の
徳實本の根

第十六課 克己

日々の生活の間に、とやせん、かくやせんと打ち迷ふこと屢あり。此の如くすれば善にして、彼の如くすれば不善、且つ此の如くするの、まことは我が利益なることも明なれど、尙ほ彼の如くする、甚だ愉快にして今之を爲さで己むの堪へ難く思はるゝことあり。

人は皆おのれを愛するものなれば、おのれの利慾の動くがまゝにして之を抑制することをなさ

己欲望と克

ざれば、善と知りつゝ之を爲さず悪と知りつゝ之を爲すことなしとせず。まことに私慾を抑へて氣隨氣儘をなさぬことはあらゆる道德實行の根底ともなるものなり。

私慾を抑へて氣隨氣儘をなさぬことを己れに克つといふ。

人は許多の欲望を有するものなり。衣食住の欲、財産の欲、名譽の欲、權勢の欲、娛樂の欲、活動の欲、すべてこれらの欲望のありてこそ、人も奮發し勤勞し世の幸福も利益も進むなれ。唯、其の間に正

女子と誘惑

善の欲望と不正不善の欲望とあり、之を知つて而して取捨すべきのみ。其の取捨の際にあつて己れに克つことをなさざれば、健康を害し、義理に背き、財産を失ひ、名譽を傷け、遂に身を亡し、家を失ふに至るべし。若き時は身體の發育に伴ふて體欲盛んなれば、これが爲に一身を誤らざるやう注意すべし。

誠に女子は誘惑に打勝つこと最も必要なり。誘惑とは人を誘ふて邪道に引き入るゝものをいふ。女子は涙もろくして容易く他人の同情を受

誘惑に勝つ法

容れ、又外見の美しきにあこがれて内面を洞察せざるきらひあり。意志の鞏固なる者にあらざれば誘惑の危険多し。誘惑に勝つは容易ならず。王陽明が「山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し」といひしは名言なり。されど日常心に邪念を絶ちて専ら正善の道に志し、若し誘惑の襲ひ來ることあるときは勇氣を鼓舞して一撃の下に之を排除せば禍害を免れ得べきのみならず、遂には其の再び乗ずべき隙なきに至るべし。

行に表裏
あらざるべし

第十七課 表裏

他人の面前なれば、言行を慎み、禮儀を正しくして、淑女の如く装へども、他人の目前を去れば無禮不作法にして、あだかも別人の如くなる人あり。思ふに其の人は彼の鞭打たれつゝ、働く牛馬や、菓子子のほしさにワンといふ犬にも似てあさましきかぎりなり。

およそ我が爲すべきことは人の見ると見ざるにかゝはらず、これを爲さざるべからず。我が

不明暗と善

爲すべからざることは人の知ると知らざるとにかゝはらず、必ずこれを爲すべからず。人の見るが故に善にして見ざるが故に不善なり、人の褒むるが故に善にして褒めざるが故に不善なりといふべからず。人の見ると見ざると、褒むると褒めざるとにかゝはらず、我が爲すべきことを爲さば、心おのづから楽しく天地に對してつゆ恥づるところなく人に對していさゝかも怖るゝところなく、のどかに此の世を送ることを得べし。決して人の褒詞に一時の快を得るの比にあらざるなり。

獨を慎め

若し爲すべからざることをなさば、人の知るまじと思へども、そゞろに心樂からず。外面はつとめて平氣に装へど、心中に疚しきところあれば、萬事につけて心臆し、言行整はず、一生不幸の生活をなさざるべからず。まして陰事は顯はれ易きものにて人の知るはずなしと思へりしことも、不思議に何處よりか世に洩れて、必ず其の報いを受くるに至るものなり。過を改むる時の一時の恥しさの比にあらざるなり。
昭憲皇太后の御歌ひとしれず思ふ心のよしあ

自重

しも照らしわくらむ天地の神の眞意深く味ふべし。又昔支那に楊震といへる人あり、天知り地知り君知り我知る、いかで知る人なしといはんとて、明暗を以て我が行を二つにせざりきといふ。常におのれ獨を慎みて心を清く持ち己れに克ちて妄念を斷つことを得ば、言行一致してよく有徳の人となるべし。

第十八課 自重と謙遜

服装の美ならざるを恥ぢ、之を美にして人に誇

らんとするは、おのれを服装より賤しきものとし
服装によりておのれの値打のあがり下りするや
う思ふものなり。おのれを軽んずるの甚しきも
のとす。人に褒めはやさるゝことは、我が良心に
さのみよしと思はずとも爲し、人に笑はれけな
るゝことは、我が良心によしと考ふるとも敢へて
爲さんとせざるものなり。自らを卑しむの大
なるものとす。

かくの如きは他人の毀譽褒貶に動かされ、流行
に支配せられ、遂には誘惑の魔手にも翻弄さるゝ

に至らん、恐れざるべからず。

世には官吏軍人農工商其他種々なる地位職分
の別あれど何人も同じく缺くべからざる國家社
會の一員たり。故に人々はよく各自の價値を認
めて他人の言論に心を動かさず、其の本分を盡く
して己が品位を保つことに力めざるべからず。
これを自重といふ。

自ら卑しみ自ら軽んずることなれば、決して
自暴自棄に陥らず、何事をも爲し得るのみならず
誘惑を斥け、權威におもねらず、よく獨立獨行して

自重と輕重

人道を守ることが得べし。

古來良妻と呼ばれ賢母といはれ淑女と稱へられたる人は、大方自ら重んずるの人なり。故に接するものをして、おのづから其の氣高き女子たることをさとらしめ、啻に輕蔑を受けざるのみならず、大なる尊敬を受けたり。之に反して自ら輕んずるの人は、他人の侮る所となり、品性を墮し、遂に救ふべからざる境遇に陥るが如し。孟子曰く、夫人必ず自ら侮りて然して後に人之を侮ると宜なるかな。

傲慢

自重に似て然かも之に反するものは傲慢とす。

人は動もすれば、己れの才智容貌門閥財産等をほこらんとするものなり。然れども、これ徒に他人の感情を害ひ却りて己れの品位を下ぐるに過ぎず。誠ニ我が智徳の勝れたる身ならざるに、衣服など美しく着飾りて誇りがに振舞ふは、傲慢無禮の態度にして、虚榮の甚しきと不徳の大なることを自白するものなり、笑ふべく惡むべし。

之に反して學徳秀で地位身分すぐれたる人にてありながら、敢へて自ら高ぶらず、言行すべて謙

謙遜
錦を衣て綱を
尙ふ。

謙遜と自重

遜ならば、誠に奥ゆかしく見ゆるものにて人をしておのづから尊敬の念を起さしむ。語に曰く「満は損を招き、謙は益を受く」と。謙遜の徳は女子の身にありては誠に大切なれども、謙遜を誤りて卑屈に陥るべからず。卑屈はおのれを賤しめ人に諂ふものにして、自重心なきの致すところなり。謙遜は自ら信じ重ざるところありて而かも之に誇らざるをいふ。この故に自重と謙遜とは鳥の兩翼の如し。二徳を兼有するに至りて始めて、我が品位を保ち世の和親を圖

人の褒め誹り

褒め誹る理由

ることを得るなり。

第十九課 褒め誹り

褒められて喜び誹られて怒るは人情の常なり。この情、女子に於て誠に切なるものあるが如し。されど人の褒め誹りは果して其の當を得たるものなりや。人の我を褒むるはその誠意より出づることあり、一時の世辭に過ぎざることあり、時として我を誘惑せんとするの奸計に出づることさへあるべ

褒められ
た心を得
た心を得

し。人の我を誹るも亦然り。その人の眞意より
することあり、一時の興に乗じてすることあり、時
としてはその人自らの非を飾らんとために、却つて
吾を誹ることもあるべし。

人我を褒めて我に其の實あらば知己を得たる
を知りて、その人にも謝し、自らも喜ぶべし。され
ど決して矜るべからず。若し其の實なきときは
實の名に添はざるを悲みて慚づべし。決して喜
ぶべからず。譽の實に過ぎたる時も亦同じ。

人悪意を以て我を褒むる時は我はその悪意の

誹られ
た心を得
た心を得

尤めだてもせず、只まめやかに會釋してさあらぬ
體にて過すべし。

人我を誹らば退いて深く省み、もし我に其の實
あらば恐れて悔悟し、謹みて改悛すべし。人の誹
りありてこそ、我が改悛の機會を得たるなれば、喜
びこそすれ、決してその人を恨むべからず。聖賢
は己れの缺點を聞くを喜ぶといへり。

人我を誹りて、我に其の實なくとも、決してその
人を恨むべからず怒るべからず。己れの心正し
く行直からば、やがて冤を雪ぐときあらんと、心を

静めて尙ほ誠意を盡し善行を勵むべし。古歌に「世の中の人は何ともいはし水清き心は神を知るらん」とあるにあらずや。それ善を爲すは人に褒められんためにあらず、只我は我が爲すべきことを爲したるのみ。されど他人の善は我より進んで之を褒むべし。これ其の人に對する同情の表出なればなり。人の非難は善意を以て之を迎へ、我が進善の縁とすべし。さはいへ他人の惡事は決して之をあばき、之を非難すべからず。只其の人偶、我が親友ならば、誠意

を以て忠告善導すべきのみ。

第二十課 質實剛健の徳

盆暮の贈答などに上包は美しけれど内味の粗悪なる品を用ふるものあり、内味は美しけれど上包の質素なるものを用ふるものあり。買物する時外見の美しきに心奪はれ實質の如何を問はざるものあり、又實質の良きを選びて外見の如何を顧みざるものあり。すべて外見に重きを置きて實際に役立つや否やを問はざるものは輕薄浮華

の人なり。實際役立つことを慮りて外見などに拘泥せざるものは質實重厚の人なり。輕薄浮華のものは眞面目ならず心落着かず虚榮に流れて人前をつくらうことを好み人間としての修養を怠る。これに反して質實重厚のものは眞面目にして心落着き、派手を好まず、流行を追はず、言行表裏なく殊に修養に心をくだく。

四五里の旅にも道遠しとて行かざるに先づ氣おぢし、偶行くことありても途々其の難儀を訴ふるものあり、心弱く元氣なきが故なり。かゝる人

は又正しきこと善きこと利益あることを聞きても進んでこれに従はんとするの勇なく、又不正なること悪しきこと利益なきことを知つても直ちに改過遷善の勇なきを常とす。これに反して四五里の道も尙近しとなし、たとひ疲れたりとも意氣盛なるものあり、意志強き人なり。かゝる人は又善きこと正しきこと利益あることを知れば飢ゑたるものの食を貪るが如く直ちにこれを實行するなり。又一朝不正なり悪なり不利益なりと聞かば直ちに改過遷善して時を移さざるなり。

かゝる意志強き人を剛健の人といふ。

意志弱く進取の氣象に乏しきものは學問を爲すにも仕事を爲すにも常に困難を訴ふるのみにてはかどらず成功を收むることを知らず、徒に他人に依頼するが故によく他人を呪咀す。これに反して剛健なる人は學問を爲すにも仕事を爲すにも進んでこれを遂げんとするの元氣充ち満ち風雨に恐れず寒暑にめげず、苦しきこと恐ろしきことに出逢へば勇氣却つて舊に倍し遂に成功を收むるなり。他人を依頼せざるが故に他人を呪

咀することなく、よく衆人と協力しておのが目的を達するなり。

近時種々なる原因よりして國民一般に浮華輕薄に流れ質實剛健の風次第に地を拂はんとす。こゝに於て大正十二年十一月十日國民精神作興に關する詔書の御煥發ありて深く時弊を矯めたまはんとす。我等臣民たるもの謹んで聖旨を奉戴して質實剛健の徳を體し、大いに聖意に答ふる所なかるべからず。

大正十五年一月二十七日
文 部 省 檢 定 濟

發行所

東京市麴町區
內幸町一丁目

振替貯金口座
八八一五番

金港堂書籍株式會社



大正十四年十月二十八日發行
大正十五年一月九日訂正再版印刷
大正十五年一月十二日訂正再版發行

著 者 井 上 哲 次 郎
發 行 者 兼 印 刷 所 金 港 堂 書 籍 株 式 會 社
代 表 者 原 安 三 郎
印 刷 所 電 新 堂

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

井 上 哲 次 郎 著
女 子 修 身 教 科 書
定 價 卷 二 金 貳 拾 參 錢
大 正 十 五 年 度 臨 時 定 價 金 參 拾 九 錢

井上女子修身教科書 卷二 終

第三十一年 北 照

永岡惠美子

